広島大学心理学研究　第3号　2003

モンゴル人幼児の異文化適応に関する研究

越中康治・前田健一

The inter-cultural adjustment of a Mongolian child in a Japanese nursery school

Koji Etchu and Kenichi Maeda

幼児の異文化適応過程に関して基礎的な資料の集積が必要とされている．また，これまでの異文化適応に関する研究は，質的な研究が中心となっていた．こうした現状を踏まえ，本研究では，外国人幼児と日本人幼児との仲間関係に関して，数量的な指標を用いて分析を行うことを目的として時間見本法による観察データの分析を行った．日本の保育園に入園したモンゴル人幼児の自由遊び時間における行動が，時間の経過とともにどのように変化していくかについて，BOR (The Behavior Observational Record; Segal, Montie, & Iverson, 2000) を参考にして分析を行った．「遊び（どのような遊びに従事しているか)」「他児へのアプローチ（仲間に対して働きかけたか)」「他児からのアプローチ（仲間から働きかけられたか)」「発話（仲間に対して発話を行ったか)」の4 側面についてデータを数量化し，異文化適応過程を，保育日誌に記載された質的データとの関連から検討した．

キーワード：異文化適応，モンゴル人幼児，時間見本法，BOR

問題と目的

日本の保育機関に入園した外国人幼児に関する研究は，実態報告を経て，1990 年代以降，観察データに基づいた適応研究が蓄積されつつある段階にある（柴山, 2002）．適応の指標として，第 2 言語としての日本語の習得（田中・宮川, 1997, 1998, 1999）や保育園生活に必要な諸行為の獲得（柴山, 1995）などに焦点を当てた研究もみられるが，日本人幼児との仲間関係に焦点を当てた研究も多い．

外国人幼児と日本人幼児との仲間関係に関する研究は，その多くが，事例を詳細に分析する質的な研究となっている．例えば，宮川らは，日本の保育園における日系ブラジル人幼児（宮川・中西, 1994, 1995）及び中国人幼児（宮川, 1996）の異文化適応過程に関して，ビデオカメラを用いた縦断的な自然観察から実証的データを提示し，事例の質的分析を行っている．また，廿日出（1999）は，中国人男児と日本人男児との友達関係の成立過程を微視的に記述している．

質的な研究が中心となっている中で，現段階では少数であるものの，仲間関係を数量的にとらえようとする試みもなされている．宮川（1989）及び宮川・浅井（1988, 1989）は，仲間関係を数量

的にとらえる指標としてソシオメトリック指名法の結果を用い，自然観察法から得られた行動の記録（自由記述型のフィールドノート資料）との関連から，日本の幼稚園におけるアメリカ人幼児の異文化適応過程を分析している．また，中西・宮川（1994）は，日系ブラジル人幼児が複数名在籍する日本の保育園に新規入園した日系ブラジル人幼児を対象として，自由遊び時間における使用言語（母語であるポルトガル語，第二言語である日本語）及び遊びの相手（日系ブラジル人幼児，日本人幼児）について，観察データの事象見本法による分析を行っている．

異文化適応過程は，客観的な観察，コーディングだけではとらえきれない問題ではある．質的な研究が果たす役割は大きい．しかしながら，質的な分析を裏付ける上でも，数量的な指標は必要となるのではないだろうか．

そこで，本研究では，幼児の異文化適応過程に関して基礎的な資料の集積が必要とされている（宮川・中西，1994）現状を踏まえ，外国人幼児と日本人幼児との仲間関係に関して，数量的な指標と質的な記録の双方から分析を行う．数量的な指標としては，時間見本法により分析された観察データを用いる．日本の保育園に入園した外国人幼児の自由遊び時間における行動が，時間の経過とともにどのように変化していくかを，「遊び（外国人幼児がどのような遊びに従事しているか）」「他児へのアプローチ（仲間に対して働きかけたか）」「他児からのアプローチ（仲間から働きかけられたか）」「発話（仲間に対して発話を行ったか）」の4側面から分析する．また，質的な記録としては，保育日誌の記述を用いる．

方　法

観察対象児　観察対象としたのは，第1著者が保育士として勤務する，東広島市内のM保育園に在籍するモンゴル人男児（以下，MS）である．MSは，父親，母親，小学1年生の姉の4人家族の長男である．MSの来日の経緯は以下の通りである．MS来日の前年（2002年7月），母親が大学院の学生として単身来日する．2003年4月，姉が来日して，東広島市内の小学校に入学する．MSは，それから1月後（2003年5月）来日する．来日した時点での年齢は4歳10ヶ月であった．複数の保育施設を見学した上で，M保育園に入園を希望し，同年6月から措置となる．MSは，園になれるため，5月下旬から保育園に通い始めた．なお，父親は，モンゴルで企業を経営しており，普段は本国にいる．

MSは，モンゴルでは，3歳2ヶ月から来日まで，保育所（day-care center）に通っていた．MSは，入園当初，日本語を話すこと，理解することはできなかった．家庭では，母語であるモンゴル語で会話がなされていた．大学院生である母親は，日本語を理解し話すことはできるが，英語の方が得意であった．保育園側とのコミュニケーションも，主として，英語でとっていた．MSに対しては，入園当初，家庭において，日本語の発音や単語を直すことはわずかにあったが，母親も「日本語は得意でない（本人談）」ため，特に指導は行わなかったとのことである．

MSを受け入れることとなったM保育園は，2003年4月に開園したばかりの保育園であり，外国人幼児の受け入れはMSが始めてであった．観察期間内に，他の外国人幼児は入園しなかった．調査を開始した5月当時，MSが年齢相応の年中児として所属することとなった異年齢クラスには，

年長児1名（女児1名），年中児7名（男児4名　女児3名），年少児16名（男児7名，女児9名）が在籍していた．同クラスは，第1著者と女性保育士1名，女性保育補助者1名が担任していた．

なお，MSに対しては，6月，9月，12月に，上野・撫尾・飯長（1991a）の絵画語い発達検査〔1991年修正版〕を実施している．上野・撫尾・飯長（1991b）の，絵画語い発達検査手引〔1991年修正版〕に従って，検査結果を語い年齢（個人の語い理解力がどのくらいの年齢水準にあるかを示す指標）に換算した結果，MSの語い理解力は，6月（4歳11ヶ月）時点で2歳児程度，9月（5歳2ヶ月）時点で2歳2ヶ月児程度，12月（5歳5ヶ月）時点で2歳8ヶ月児程度であった．

観察時期と方法　2003年5月下旬から同年12月下旬までの自由遊び時間に観察を行った（8月はMSの家庭が長期休暇をとったため中断した）．各月の前半と後半で，室内遊び，外遊びをそれぞれ1回ずつ各3分間，合計12分間観察し，ビデオ録画を行った．なお，5月は下旬に，室内遊び，外遊びをそれぞれ2回ずつ各3分間，合計12分間観察した．観察はいずれも日を改めて行った．

分析方法　分析には時間見本法（1/0サンプリング法）を用いた．観察単位は10秒間であった．1ヶ月の観察時間は合計12分（720秒）であったため，1ヶ月の観察単位は合計72回となる．ビデオ録画された観察対象児の様子は，1観察単位毎に，「遊び」「他児へのアプローチ」「他児からのアプローチ」「発話」の4側面について分析が行われた．なお，1観察単位内に，分析の1側面について異なる複数の行動が生起した場合には，優勢だった行動を1つ選びチェックする方法をとった．すなわち，1観察単位内で，各側面について1回のチェックを行うこととした．

「遊び」に関しては，畠山・畠山・山崎（2003）を参考に，MSが1観察単位内に最も多く従事した遊びについて，「1人遊び（及び1人での行動）」「並行遊び」「協同遊び」のいずれかにチェックを行った．

「他児へのアプローチ」「他児からのアプローチ」に関しては，BOR（The Behavior Observational Record; Segal, Montie, & Iverson, 2000）をもとに幼児の行動の分析を行った畠山・磯部・越中・蔡（2002）を参考にした．BORとは，就学前児の遊びや社会的行動の記録のために開発された時間見本法による観察記録法であり，観察対象児が従事している行動だけでなく，観察対象児の行動に対する他児の反応についても同時に記録することができる．また，BORでは，従来評定されてこなかった相互作用の質的側面も評定することが可能である．例えば，行動に伴う感情の質を示すために，ポジティブな表情（笑うなど）を示した場合はプラス（＋），ネガティブな表情（泣く・怒るなど）を示した場合はマイナス（－），ニュートラルな表情を示した場合にはゼロ（0）を記録する．本研究では，「他児へのアプローチ」の側面について，1観察単位内に，MSが他児にアプローチをした際，他児からどのような反応が返ってきたかについて，＋，0，－のいずれかにチェックを行った（他児へのアプローチがなかった場合にはアプローチなしにチェックを行った）．「他児からのアプローチ」についても同様に1観察単位内に，MSが他児からアプローチを受けた際，どのような反応を示したかについて，＋，0，－のいずれかにチェックを行った（他児からのアプローチがなかった場合にはアプローチなしにチェックを行った）．

「発話」に関しては，1観察単位毎に，MSの他児に対する発話があったか否かについてチェックを行った．

「遊び」「他児へのアプローチ」「他児からのアプローチ」「発話」それぞれの各分類項目における信頼性は，全データの50%を用い，第1著者を含む2名の評定者間で確認した．一致率は，「遊び」でκ=.97，「他児へのアプローチ」でκ=.78，「他児からのアプローチ」でκ=.95，「発話」でκ=.97であった．不一致部分は協議の上で調整した．

保育日誌　本研究では，質的な記録として保育日誌を用いた．MS及びMSが所属する異年齢クラスの仲間の日々の様子を，第1著者を含む担任保育士が保育日誌に記録した．

結　果

保育日誌から

まず，保育日誌に基づき，5月当初から12月までのMSの様子を記述する．

(1) 5月当初の様子　登園初日，MSは不安そうな表情を示していた．年中男児数名がMSに好意を示し，つつくなどしてかかわりをもとうとするも，MSは当惑した様子であった．翌日からは，同様にちょっかいを出され喜び，仲間と互いにおかしな表情をつくってにらめっこをする様子もみられた．しかし，自由遊び時間には，保育士に促されても仲間との遊びに加わることに抵抗を示し，遊具の車に乗り保育室内をうろうろすることが多かった．

(2) 6月の様子　設定保育において，モンゴルの紹介をしたことなどをきっかけとして，「MSくんは，モンゴルから来たんよね」などと，仲間から認知されるようになる．また，給食時に「おかわりください」と言えるようになったことをきっかけとして，仲間がMSに言葉を教えようとする様子も見受けられた．間もなく，「ありがとう」「おかわりください」「おはよう」「さようなら」「(おなか)いっぱい」「トイレ！」など，基本的生活習慣に関する発話を頻繁に行うようになった．著者ら保育士の名前も覚え，呼ぶようになった．日本語を習得し促されて使う中で，仲間から認められ，相互作用に発展するケースもあった．

自由遊び時間においては，クラス内で流行していたヒーローごっこ（ヒーローになりきって，仲間同士叩き合うまねをする）を通して，非言語的ながら，他の男児とコミュニケーションをとり，楽しむことができていた．6月下旬には，仲間に対して「貸して」「見て」などと発話を行う様子も見受けられた．

また，母親の話では，このころから家庭においても，単語程度ではあるが日本語を話すようになったとのことである．

(3) 7月の様子　他児の名前を呼んだり，他児の保護者の顔を覚え働きかけるようになった．また，七夕の歌を歌ったり，1，2，3，4 …と数唱を行ったり，「痛い」などと咄嗟の時にも日本語が出るようになったりと，順調に日本語を習得している様子であった．また，園になれてきたこともあってか，設定保育場面等において他児とふざけることも増えてきた．その一方で，他児がふざけたり逸脱行為を示した際には，敏感に反応し，頻繁に保育士の介入を求めたり，直接注意するようになった．

自由遊び時間においては，対人葛藤を自らじゃんけんで解決する様子も見受けられた．しかしながら，全体としては，室内遊びでは1人でヒーローになりきったり，外遊びでは1人で泥団子をつ

くったりと，前の月に比して，仲間との相互作用は少なくなった．

(4) 8 月の様子　8 月に入り，MS は，父親，母親，姉とスイスで長期休暇を過ごした．母親の話では，MS は休みの間，日本語をよく話していた．一方，小学校に通う姉の方は「シャイで，あまり日本語を話さなかった（母親談）」とのことである．

(5) 9 月の様子　長期休暇明けの登園初日の朝は，少し泣き，好意的に近寄ってくる仲間に対しても不快な表情をしていたが，その日の内に調子を取り戻した．翌日からは，普通に登園し，仲間とかかわって遊ぶ姿も多く見受けられるようになった．

なお，母親の話では，このころから，姉にも日本人の友達ができ，家庭において，MS と姉が 2 人で，保育園のことや学校のことについて日本語で話すようになったとのことである．

(6) 10 月の様子　日本語もだいぶ話せるようになり，自由遊び時間には，他の男児とサッカーなどを楽しむようになった．全体として，仲間とのかかわりが増えてきたという印象を受けた．その一方で，物の取り合い等の対人葛藤の際に，相手を叩いたり，噛みついたりするようになった．頻発したため，家庭と連携し指導した．結果として，MS も納得し，その後はこうした行為は出現しなくなった．しかし，他児に手を出さなくなったかわりに，保育士に「○○くんが，○○した」などと訴えにくることが増えた．

(7) 11 月の様子　自由遊び時間の様子に特に変化はみられなかった．しかし，10 月下旬頃から，MS は時折，保育士に頭が痛いと訴えるようになっていた．この旨を母親に伝えると，「長い時間座っていたり，自分がいやなことがあると頭が痛いと言うことがある」とのことであった．その後も，給食後の着席している時間や設定保育場面において，頭が痛いと訴えることが度々あった．大事をとって無理をさせないよう配慮すると，まもなく治まることがほとんどであった．

(8) 12 月の様子　先月に引き続き，頭が痛いと訴えることが度々あった．自由遊び時間には，砂場で仲間とともに 1 つの物をつくったり，ストーリー性のあるヒーローごっこ（男児が女児をさらったり，女児を助けたりする）を楽しむ様子がみられるようになった．

ＭＳが従事していた遊びの種類

MS が従事していた遊びの種類について，1 観察単位あたりの割合を，各月ごとに Figure 1 に示す．入園当初の 5 月下旬では 25.0%であった協同遊びが，6 月では 52.8%にまで上昇している．しかし，7 月には 37.5%にまで減少し，8 月を挟んで 9 月も 34.7%に留まっている．10 月には 59.7%にまで回復し，11 月は 56.9%と同程度，そして，12 月には 80.6%とさらに上昇している．

なお，興味深い点として，協同遊びの割合が増加した 10 月及び 12 月の前の月（9 月及び 11 月）で，並行遊びの割合が高くなっている（それぞれ 13.9%，8.3%）ことがあげられる．

ＭＳから他児へのアプローチ

MS から他児へのアプローチと，アプローチに対する他児の反応について，1 観察単位あたりの割合を Figure 2 に示す．他児へのアプローチの時間経過に伴う変化は，従事していた遊びの変化と類似した傾向を示した．他児へのアプローチは，5 月ではほとんどみられなかった（1.4%）が，6 月で 29.2%にまで上昇した．しかし，7 月には他児へのアプローチは皆無となる（0.0%）．8 月の長期休暇を挟んで 9 月になると 30.6%にまで回復し，10 月（29.2%），11 月（40.3%），12 月（47.2%）と

緩やかに増加している．MS のアプローチに対する他児の反応に着目すると，6 月から（7 月を除いて）12 月にかけて，他児のポジティブな反応は減少している．一方で，11 月，12 月では他児のネガティブな反応が増加している．

他児からＭＳへのアプローチ

他児から MS へのアプローチと，アプローチに対する MS の反応について，1 観察単位あたりの割合を Figure 3 に示す．他児からのアプローチに関しても，5 月（2.8%）から 6 月（23.6%）にかけて増加し，7 月（12.5%）に減少している．従事していた遊び及び他児へのアプローチと異なる点は，8 月を挟んで，9 月で 27.8%に増加した後，10 月で再び 12.5%にまで減少していることである．その後は，11 月（26.4%），12 月（22.2%）と回復している．他児のアプローチに対する MS の反応に着目すると，特に 9 月，10 月に MS がネガティブな反応を示しているといえる．

ＭＳの他児に対する発話

MS の他児に対する発話について，1 観察単位あたりの割合を Figure 4 に示す．5 月から 7 月までは皆無であり，9 月以降増加している．9 月から 10 月にかけて，11 月から 12 月にかけて増加している点で，9 月以降は，従事していた遊びの変化と類似した傾向を示しているといえる．

発話の内容について，「貸して」などの他児に要求を行う発言，「ダメよ」などの他児に禁止や拒否を行う発言は，9 月からみられた．これらに加え，10 月では，遊びの中心となっている仲間の発言を真似て，「よせて」と言わずに仲間入りしてくる相手に対して「『よせて』って言って」と注文をつける様子もみられた．11 月では，「これ，○○なんよ」「もう 1 回，○○してくる」などの自分の遊びを説明する発言や，「ねぇ，ねぇ，○○したい」などの遊びの提案を行う発言がみられた．さらに，12 月では，遊びの中心となっている仲間に対して「いい？」「こうやってやるの？」「○○したら？」などと同意や承認を求める発言も増えた．

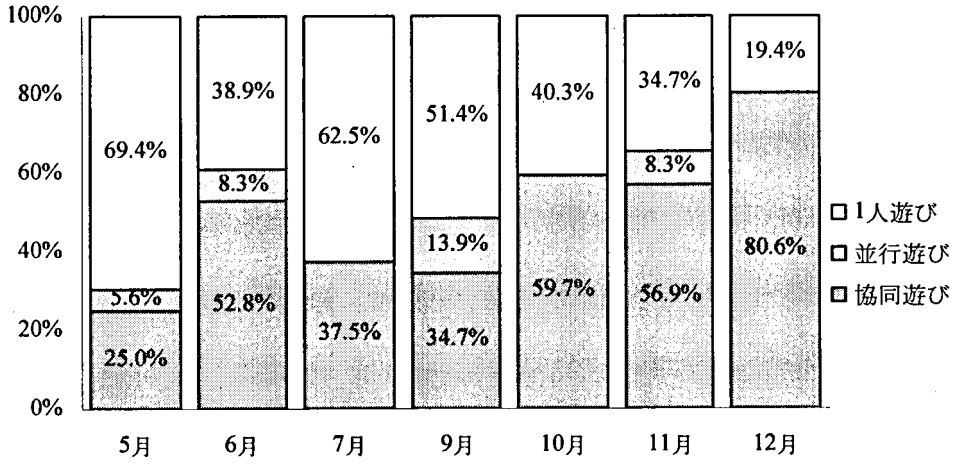

Figure 1　MSが従事していた遊びの種類

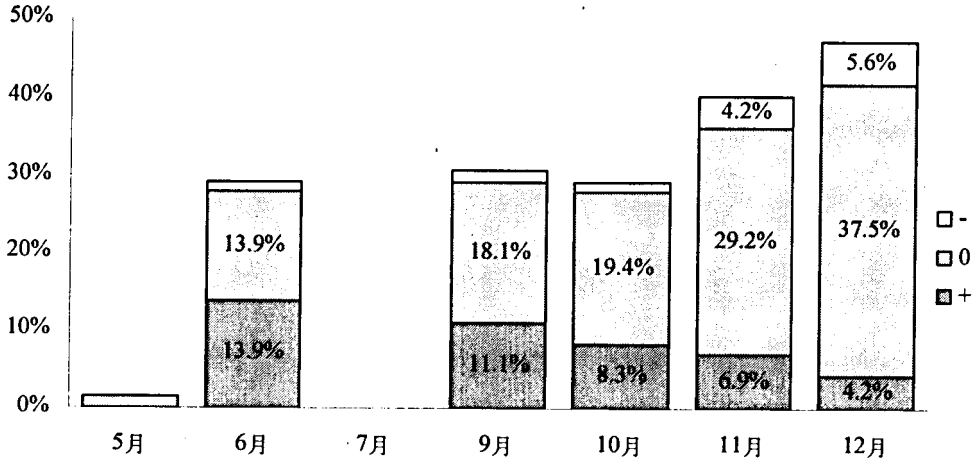

Figure 2　MSから他児へのアプローチと他児の反応

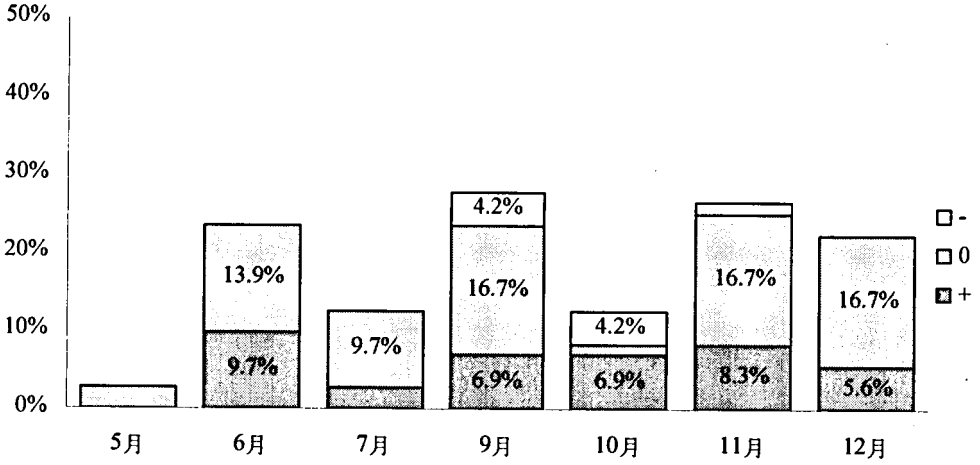

Figure 3　他児からMSへのアプローチとMSの反応

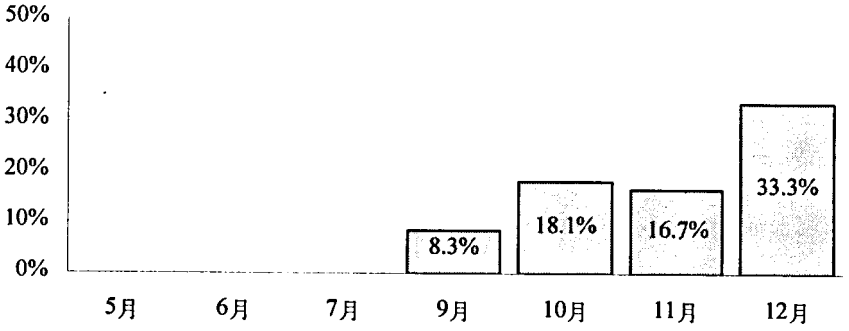

Figure 4　MSの他児に対する発話

考　察

本研究では，日本の保育園に入園したモンゴル人幼児の自由遊び時間における行動が，時間の経過とともにどのように変化していくかを，「遊び（どのような遊びに従事しているか）」「他児へのアプローチ（仲間に対して働きかけたか）」「他児からのアプローチ（仲間から働きかけられたか）」「発話（仲間に対して発話を行ったか）」の4側面から分析した．以下では，4側面に関する数量化されたデータと，保育日誌に記載された質的データとの関連から検討を行う．

MSの適応状態は，概ね良好であったといえる．MSは，入園前，日本語を理解し話すことはできなかった．また，M保育園においては，外国人幼児はMS 1人であったため，適応初期に同国人と閉鎖的なエスニックグループを構成し，それをベースに適応をはかる（中西・宮川，1994）ということもできなかった．それにもかかわらず，入園して1月経たないうちから，日本語を使用し始め，仲間との遊びも時間の経過とともに充実し，観察を終えた12月には自由遊び時間の8割を協同遊びに費やすまでに至った．一時期，頻繁に攻撃行動を示すことはあったが，家庭との連携ですぐに改善された．保育園側も母親側も，この他には特に適応上問題を示さなかったという印象を受けている．こうした順調な適応過程をもたらした要因としては，MSの個人的な資質，MSの家庭環境などがあるものと考えられる．

しかしながら，仲間との相互作用に関しては，直線的に増加していったわけではない．7月には一時的に減少を示している．柴山（2002）によれば，異文化適応は，時間の経過とともに「初期適応期－不適応期－回復期」という一連の過程を辿る．このことを踏まえると，MSにとって，7月は「不適応期」であったと解釈できる．

何故，7月が不適応期となったのか，仲間との相互作用が減少したのか，その原因を探る上で，保育日誌における記述から注目すべき点として，他児がふざけたり逸脱行為を示した際に，敏感に反応し，頻繁に保育士の介入を求めていたことがあげられる．こうしたMSの行為は，保育士の注目を獲得することを目的としてなされていたものと考えられる．

石黒（1994）は，外国人幼児の異文化適応過程に関する事例研究で，観察対象児が保育士の注目を獲得するための方略として「不参加戦略（やるべきことをせずに，すねるなどすることで注目を獲得する）」「援助戦略（幼い仲間の世話をすることで注目を獲得する）」「告発戦略（ふざけたり，逸脱行為を示す仲間を見つけ，保育士に伝えることで注目を獲得する）」の3つを使用したことを記述している．

MSの場合，「不参加戦略」「援助戦略」を使用することはなかったが，特に7月には「告発戦略」を多用することで保育士の注目を獲得しようとしていたものと考えられる．6月，MSは，まだ来日したばかりであり，保育士や仲間の注目を一身に浴びていた．しかし，ある程度日本語も獲得し，適応を示しはじめた7月では，前の月ほどの注目を浴びなくなった．7月になって，1人でいる時間が増え，他児へのアプローチが皆無となったのは，MS の関心が保育士に向かっていたためではないだろうか．また，7月では，他児からのアプローチも少なくなっている．「告発戦略」を多用することにより，告発された仲間のMSに対する印象が悪くなり，それ故，1人でいる傾向がさらに強まった可能性もある．

8月の長期休暇を経て，家庭において再び安心感を取り戻したのか，9月には他児へのアプローチが再び増加している．また，9月には並行遊びに従事する様子も見受けられた．並行遊びは，協同遊びなどの集団遊びに至る媒介形態であることが指摘されている（中野, 1990）．MSの場合にも，9月の並行遊びを経て，10月に協同遊びに参加することが増えた可能性がある．

10月には，協同遊びの増加に伴い対人葛藤も増え，その結果として，攻撃行動が出現したものと考えられる．また，攻撃行動が出現しなくなった後は，再び「告発戦略」が多用された．このことで，MSに対する仲間の印象が，再び悪くなった可能性がある．仲間との関係が一時的に悪化したことによって，協同遊びが増加しているにもかかわらず，他児からのアプローチが減少し，MSも他児のアプローチにネガティブな反応を示す傾向が強まったと考えられる．

しかし，11月では，再び並行遊びが出現し，他児に対して自分の遊びを説明する発言や遊びの提案を行う発言もみられるようになった．さらに，12月では，遊びの中心となっている仲間に対して同意や承認を求める発言が増えている．この時期のMSは，巧みに自己調整しながら仲間との相互作用を行っていたものと考えられる．また，MSは，10月頃から頭が痛いと訴えるようになったが，これは「告発戦略」にかわる，仲間から直接的に否定的な印象を受けない，新たな注目獲得方略であった可能性もある．

本研究は，1人の外国人幼児の観察データに基づいており，他の異文化適応過程に関する先行研究と同様，一般化することはできない．しかしながら，本研究は，BORをもとにした時間見本法による分析を行ったことで，今後，他の研究との比較を可能にしたと考えられる．

引用文献

石黒広昭　1994　参加による自己の社会的形成―異文化児の保育園での6ヶ月―　宮城教育大学心理学研究，**3**, 40-52.

畠山美穂・磯部美良・越中康治・蔡　佳玲　2002　幼稚園女児にみられる関係性攻撃の被害者の行動特徴に関する研究―幼稚園での観察を通して―　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部，**51**, 343-349.

畠山美穂・畠山　寛・山崎　晃　2003　仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか？―日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して―　保育学研究，**41**, 20-28.

廿日出里美　1999　保育所における異文化間の友だち関係の微視的分析　保育学研究, **37**, 43-50.

宮川充司　1989　アメリカの子どもが日本の幼稚園に　小嶋秀夫（編）　乳幼児の社会的世界　有斐閣　Pp. 125-141.

宮川充司　1996　外国人乳幼児の異文化適応過程に関する事例的研究(1)：中国人女児の事例　椙山女学園大学研究論集, **27**（人文科学編）, 125-141.

宮川充司・浅井道子　1988　在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応：入園後の半年　会津短期大学学報, **45**, 25-44.

宮川充司・浅井道子　1989　在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応（その2）：入園後

半年から1年半　会津短期大学研究年報, **46**, 37-82.
宮川充司・中西由里　1994　日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（I）　椙山女学園大学研究論集, **25**（人文科学編）, 47-74.
宮川充司・中西由里　1995　日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（III）　椙山女学園大学研究論集, **26**（人文科学編）, 1-9.
中西由里・宮川充司　1994　日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（II）：入園当初3ヵ月間の分析から・2児の比較　椙山女学園大学研究論集, **25**（人文科学編）, 75-84.
中野　茂　1990　遊び　無藤　隆・高橋惠子・田島信元（編）　発達心理学入門 I—乳児・幼児・児童—　東京大学出版会　Pp. 147-160.
Segal, M., Montie, J., & Iverson, T. J.　2000　Observing for individual differences in the social interaction styles of preschool children.　In C. E. Schaefer, K. Gitlin, & A. Sandgrund (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2nd ed.). New York: John Wiley & Sons, Inc. Pp. 544-562.
柴山真琴　1995　ある中国人5歳児の保育園スクリプト獲得過程—事例研究から見えてきたもの—　乳幼児教育学研究, **4**, 123-140.
柴山真琴　2002　幼児の異文化適応過程に関する一考察—中国人5歳児の保育園への参加過程の関係論的分析—　乳幼児教育学研究, **11**, 69-80.
田中幸子・宮川充司　1997　アメリカ人幼児の第2言語としての日本語獲得に関する学際的・事例的研究（I）　椙山女学園大学研究論集, **28**（人文科学編）, 109-123.
田中幸子・宮川充司　1998　アメリカ人幼児の第2言語としての日本語獲得に関する学際的・事例的研究（II）　椙山女学園大学研究論集, **29**（人文科学編）, 115-137.
田中幸子・宮川充司　1999　アメリカ人幼児の第2言語としての日本語獲得に関する学際的・事例的研究（III）　椙山女学園大学研究論集, **30**（人文科学編）, 47-60.
上野一彦・撫尾知信・飯長喜一郎　1991a　絵画語い発達検査　日本文化科学社
上野一彦・撫尾知信・飯長喜一郎　1991b　絵画語い発達検査手引〔1991年修正版〕　日本文化科学社

謝　辞

本研究にご協力を賜りました東広島商事（株）みづき保育園園長馬越英美子先生，保育士の皆様，MSくんを始めとする園児の皆様に深く感謝申し上げます．また，MSくんのお母様には，研究にご理解を賜り，アンケートにもご協力をいただきました．その際，馬越真紀子様には，通訳をしていただきました．記して感謝の意を表します．